人の絆 生み出す一輪を

花屋開業 須子さん（熊本市）

「熊本地震で感じたのは、人と人とのつながりの大切さ。花を通じて、地域や家族同士のコミュニケーションを生み出していきたい」。昨年8月、熊本市中央区出水に「花屋はな輔（すけ）」を開業した須子栄輔さん(27)は、復興への思いを語る。

約20坪のテナントスペース。装飾用に使うアセビの枝や、生産者から仕入れた色とりどりの花が並ぶ。花の宅配や小売り、イベント会場の装飾に忙しい日々だが、地震の影響で予期せぬ苦労も味わった。

いずれは独立するつもりで、4年前から、葬儀や結婚式の装飾を手掛ける複数の生花店で修業を積んできた。昨年、いよいよ独立しようと準備をしていた矢先に、入居予定だった同市内のビルが地震で損壊。計画は振り出しに戻った。

代わりの物件を探し回ったが、地震後は貸店舗が激減。家賃も上がり、折り合わない物件ばかりだったという。周囲からは「タイミングが悪い」と、創業延期を勧められた。

しかし、創業への思いはむしろ強まっていた。7月半ば、マンション建設現場の詰め所になっていた現在の物件でようやく契約。約200万円の創業資金を地元金融機関から調達し、目標としていた8月7日の「花の日」開業にこぎ着けた。

力を入れるのは、1人暮らしの高齢者に定期的に花を届け、離れて暮らす家族に様子を知らせる見守りサービス。配達の際に交わした会話内容を当日中にメールで家族に送る。

現在は約30軒に月1～4回、花を宅配。「お年寄りが楽しみにしてくれるし、家族と連絡を取り合うきっかけになる。近所で話題になれば、地域のコミュニケーションも活性化する」と、手応えを感じている。

今年3月下旬には、イオンモール熊本（嘉島町）の本格再開イベントで記念モニュメントを制作。東日本大震災で被災した福島と熊本の子どもたちの交流にちなみ、シンボルのヒマワリを大胆にあしらった。今月下旬には、熊本市中心部に開業する下通NSビルで、核となる「COCOSA」の装飾を担当する予定だ。

「復興へ歩む熊本で記念になる仕事ができてうれしい。迷わず踏み出して良かったし、地震後だからこそ、周囲のサポートにも恵まれていると感じる」

須子さんは、県信用保証協会が昨秋組織した新規創業者の支援組織「くまもとシーズクラブ」のメンバー。約150人いる会員の半数は、熊本地震後の創業者だ。「業種は違っても、志は同じ。お互いに頑張ることこそが復興。そんな思いを共有している」

2年以内に株式会社化し、宅配や装飾などの事業を拡大させる展望を描く。「これからも若い自分たちがポジティブに動いて、復興につなげていきたい」（辻尚宏）

「花の良さを伝えていくことが熊本の復興につながる」と話す須子栄輔さん＝熊本市